

『静かな一日』 作…矢内原美邦

登場人物

松田正 三五歳（夫電会社）

松田雪 三五歳（大学勤務 研究者）

机のセット舞台正面。

小さな家が600個並んである。

2枚のスクリーンが天井からつらられている。

舞台上、机、椅子のセットははなれたところにひとつ椅子があり、その椅子に座っている正。

照明がつくと、正はゆつくりと首を下げて床に転げ落ちて眠る。

正「とにかく目を閉じることです。ほら、そうすれば、あらゆるイメージのなかに飛び込んでいけるでしょう。目を閉じてみる。目を閉じると、そこには暗闇があるでしょう。いつだって、暗闇はすぐそばにあるのに、ただ、こうやって目を閉じればいいだけなのに、ほら、またそうやって目を開けようとする。閉じて、閉じて、寝なさい。目を閉じて。はやく。はやく寝なさい」

身体をおこす。もしくは、感じを変更。

正「こどもの頃、そう母に言われると、眠るのが怖くてしかたなかった。眠ったままもう起きられないんじゃないかって想像したら、もうイヤで、目を閉じるのがイヤで、イヤで。イヤでしようがなかった。でも今、大人になった今、目を閉じても、あの時ほど怖くない。大人になった今、ベットに横たわれれば、すぐに眠りにつくことができる。もう特技といてもいいかもしれない。目を閉じたら、すぐにぐっすり。ちよつとした特技といてもいいかもしれない。世の中には寝たくても眠れない人もいるというの

に、私は（僕は）目を閉じたら、すぐにぐっすり。その日おこったことを思い出すこともなく、明日の予定を思い返してみることもなく、ましてや不意に思い出される子どもの頃の苦い記憶に苦しまされることもなく、夢を見ることも、羊を数えることも、あらゆるイメージのなかに飛び込むことも、暗闇を感じることも、なにもなく、ただなにもしないで、ただ眠りにつく。むしろ今、大人になった今、そうして気絶でもしたように、すぐに眠ってしまうことに怖さを感じたりもする。横になるとすぐに意識が遠くなり、気が付けば朝で、部屋は明るく、昨日と同じ。今日は雨、あれ？（舞台前にでてきて、空を見上げるような感じで）今日の天気予報が雨なのは知ってるんだけど、あと何分でふりはじめるんだろう？降りそうなんだけど、降らないし、あと何分安全なのかな？なんか感じでは降りそうだからな、コンビニ行くのどうしようかな？ここから走って行って3分20秒くらい、買い物にお惣菜セットでしょう、ウーロン茶でしょう、2分くらいかな？帰りにまた3分20秒8分40秒はかかるかな、あと8分40秒安全かな？あれ、雨かあ、昨日と同じ今日は雨かあ」

突然、照明の感じ変わり、部屋にいるようなイメージで机セットまわりに照明がつく。

雪、テーブルセットに座っている。

雪「今日は雨ね」

正「（驚く）雪ちゃん、帰ってたの？いつ？さっき携帯にメッセージおくれたんだけど」

椅子を動かす正。

椅子を動かす姿はまるでダンスで決められた規則のように複雑に椅子をおきながら夫婦の会話が進む。

雪「知ってる、そこでブツブツ独り言を言ってたから、それに雪ちゃんと呼ぶのはやめてって言っているでしょう、私はいつも松田くんって敬意を払って呼んでるでしょう」

正「だって、夫婦だから」

雪「そこ、夫婦だからって下の名前で呼び合うなんておかしいでしょう」

正「わかったよ、松田さん、これからは松田さんって呼ぶことにするよ」

雪「今日ね、雨がふってるでしょう」

正「うん」

雪「だから、」

正「うん」

雪「だから、仕事がかどらなかつたの」

正「雨のせい？」

雪「そこ？」

正「そこ？」

雪「いい、（言い聞かすように説明）天気が悪かったら、衛星放送なんてみれないでしょう。画像が全て×（バツ）みたいにでて、とぎれとぎれで、きれたりして、みれないことってあるでしょう？」

正「それって、天気がよくなるのを待つしかないのかな？」

雪「そうよ（うなづく）天気がよくなるのを待つしかないの、衛星放送なんて、

て、
天気がよくなるのを待つしかないのよ」

正「温くなるのは、もう春を待つしかないのかなあ」

雪「そこ」

正「そこ」

雪「松田くん」

正「はい」

雪「私は天気がよくなるって言ったのよ、天気がよくなるのを待つしかないって。温度の話はしてないの。いくら寒くても、天気がよければ衛星放送はうつるわ、寒くてもね」

正「いまだに天気に左右されるなんて、インターネットだったら天気に左右されないよ、そっか、雪ちゃんの気分は衛星放送のように簡単に左右されるんだね。だとしたら、雨のせいで仕事がかどらなかつたのもよくわかるよ」

雪「雪ちゃんじゃない」

正「そこ？」

雪「そこ。天気と人の行動はつながってるのよ、まだわからないの？」

正「うん、まあね」

雪「うん、つて、おかしいでしょう」

正「そう？」

雪「わかってないのに「うん」つて」

正「おかしい？わかってないのに「うん」つて」

雪「わかってないのに「うん」だなんてバカにしてる」

正「うん」

雪「ほらまた」

正「バカにしてないよ、バカにして言ってる「うん」だとは限らないでしょ」

雪「限るのよ、限る。バカにした「うん」だった。限るのよ」

正「雪ちゃんつてこんなにめんどくさい人だったっけ？」

雪「そこ」

正「そこ？（あらたまつて）雨で仕事がかどらないって言ったのが、そうかもつて、そんなことつてあるんだなあって、だから「うん」。僕はいつもパソコンばかりしてるでしょ？インターネットのなかでは天気も自由、温かいも寒いもない、だから、きつと鈍感なんだ、うん、晴れてても、雨でも。でもたしかにね、じつさいに人と会うと、言葉につまんで、なに話せばいいのかわからなくなっちゃって、今日はいいい天気ですねとか、今日も雨ですねとか、そうやって天気の話をして間をもたせたり、だから暑いです、寒いですね、つて、そうやって天気と人の気分が関係するということもあるのかなつて、だから、「うん」だよ」

雪「でも温度の話はしてないけどね」

正「そこ？」

雪「そこ。私が雨で仕事がかどらないって言った気分がわかった？」

正「うん」

雪「理解してくれてありがとう」

正「うん」

雪「ありがとう」

正「いいよ、そんな謝らなくても」

雪「あやまつてないよ」

正「あやまつたでしょう」

雪「私ありがとうございますって言ったの。お礼。感謝」

正「うん」

雪「過ちを後悔して残念に思うこと、それが謝る。だからあやまったのではない。感謝したのよ、そう、ありがとうって感謝」

正「雪ちゃんってこんなにもめんどくさい人だったっけ？」

雪「そこ！」

正「そこ？（わからない、自分の欠点に気づかないそこです）あの、松田さんって（愛情があるように言う）」

雪「（途中、正の会話にくいこむように）いい、解釈がまちがってるのよ、まちがいは正さないよ。私たちもつと理解しあわなきやいけないでしょ？理解しあわなきや」

正「うん」

正、お茶を飲もうとする。

雪「そこ！」

正「あつつ、なに？そこ？」

正、湯のみ茶碗を机の上におき、またも椅子を持ちウロウロする。

それはまるで、大工さんのように、椅子をみたり、机をみたりしている。

雪「そうやってお茶を飲んでいつも熱っ、って言うでしょう。湯のみちゃわんはよくできてきていて、直接温度に触れるようにできてるの。ほら、ティーカップとかコーヒーカップみたいにとつてがついてないでしょう、これは温度を感じることが出来る日本の素晴らしい発明だと思うけど、松田くんはいつも（お茶をのむふり）熱っ、あつつ、舌火傷したよっ、とか言ってます、なんて馬鹿なんだろうって心の底から思って、私、なんでこんな人と結婚したんだろうって、指で温度を感じられない人なんて（湯飲み茶碗を持ちながら説明する）」

正「そこ？」

雪「そこ！松田くん、ときどき高校生の頃に自殺しようとした話をするでしょ？クリスマスで、ガチョウ食べて、自殺しようとしたって」

正「いじめられてたからね。いじめられたなあ、いじめられてばっかだよ」

雪「松田くんの言葉のなかにはひとつも真実がないのよね」

正「クリスマスに腐ったガチョウを食べて、寄生虫にやられて。うー、毒はもう回っている、血には血を！ってハムレットの台詞をなんでもなんでも言いながらあつさりと死ぬっていうハムレットレッツっていうアニメがあつたんだよ、感動の最終回だったよ、覚えてる？それをみて十七歳の僕は自殺を試みて、あのガチョウはすっかり腐ってたなあ、うー（大声で忘れなさい）」

雪「うー（大声で）毒はもう回っている、血には血を！って、そんなバカげた自殺がある？腐ったガチョウってどこで手に入れたのよ」

正「あいつは冷蔵庫のなかにいたんだ、賞味期限を1日オーバーしてたよ」

雪「冷蔵庫にいられておいて、そのくらいで腐ったりしないわ」

正「冷蔵庫にいけないで、だしばなっしにしておく人なんていないでしょう？」

雪「まったく真実味がないのよね」

正「例え話だよ、いじめられっ子がいじめを克服して、苦勞して、ここまで生きてきたんだ。だからこれからも頑張ろう、頑張っていこうっていう例え話」

雪「そこ」

正「そこ」

雪「やっぱり仕事しよ」

雪、湯のみ茶碗を持って舞台上手にはける。

正、雪がはけてゆく姿をみながら

正「雨、まだやみそうにないよ、ねえ、今日おでんだよね？おでんが食べたいなあ。おでんだよね今日？ねえ、ちよつと無視しないでよ、ねえ。たとえば、たとえば、たとえば、あまり人通りのないところに建っている家、明日出すゴミが玄関先にまとめておいてある家、庭先に古新聞や段ボールが束ねて置いてあるような家、ポストにチラシとかがたまっている家、カギのない物置がある家、いかにもよく燃えそうな古い木造建築の家。まあ、たいがいそんな家に火をつけたくなるわけで。一昨日の晩、あ

れは何時頃だったかな？寝ぼけててよく憶えてないんだけど、消防車のサイレンが遠くのほうでずっと鳴っているのが聞こえてて、あ、火事だな、けっこう近いな、なんて思いながらも、眠ってしまって、それでしばらくしてまた目が覚めると、やっぱりサイレンはまだ鳴ってて、いま2階の部屋の窓から見たら、赤く燃え上がる夜空が遠くに見えるんじゃないかなって、想像してみたりするんだけど、やっぱり眠気には勝てず、燃え上がる夜空を想像しながら、頭の中をぐるぐると消防車が走り回っているような感じがして、それでも、それでもやっぱり眠ってしまっただけ。あれ、やっぱり放火だったんだ。それも犯人は、この町に住むごく普通の主婦だっていうんだから。火事になればひとたまりもないよ。放火だなんて。僕が放火魔だったら、まず1リットルのペットボトルにガソリンを入れて、その口に新聞を丸めて詰め込んで、その先に火を付ける。これが一番確実。ゆつくりと、じわじわと、それでいて確実に燃え広がるのが理想的なんだ。一気に燃え広がったら、僕まで燃えちゃうからね。新聞紙が燃えてる間に、逃げるんだ。逃げ出して、しばらくして振り返ったら、ゆらゆらと赤い炎の影が揺れているのがきつと見えるよ。どこの家にだって、火を付けたくなるような場所がひとつやふたつはあるからね。明日起きたら、僕たちの家もちゃんと確認しておこう。怖いよ、放火。ああ、もう僕いつそのこと消防団入りたいんだけど。でもなあ、体育会系のノリって嫌いなんだよなあ。実際どんな感じなんだろ？消防団って？」

雪、無視して、そのへんに散らばった書類をまとめて始める。

雪「今日は雨ね」

正「あれ？明日の予定だいじょうぶなの？なんかあるんだっけ？」

雪「どうして？（正をみる）」

正「だってほらっ、カレンダーにマルしてある、明日（ちらかった書類のなかから一枚紙をとって言う）」

雪「私が出したんじゃないわ、松田くんが出したんでしょ」

正「ボクじゃないよ」

雪「じゃあ、誰が出したのよ。カレンダーにスケジュールとか書き込むのやだからやめてっていつも言ってるじゃない」

正「だからボクじゃないって、だいたい明日はなにも予定ないし」
雪「そうやって毎日がスケジュールで埋め尽くされていくのがイヤなの。明日にはこれをしなきゃ、明後日までにはこれをしなきゃ、明々後日にはここに行つて、だれかと会つて、つて、そんな予定になんの意味があるの？一日はあつという間に終わつてしまう。ああ、もう明日はやっぱりお休みにする」

雪、胸に抱えた紙の束をどさつと投げ捨て、紙の山に埋もれるようにして書類を探す。

正「ねえ、少しは整理整頓したら？」

雪「…」

正「ねえ、いつもそこ置きっぱなしにしてるでしょう？？大切な書類とかは置いとく場所を決めたほうがいいよ」

雪「…（ひたすら書類をさがしている様子）」

正「ねえ、3日前にプリントアウトした書類、見つからないでしょう？」

雪「（バサリと起き上がつて）しってるの？」

正「しらないよ、どうしてボクがしってるの？」

雪「どこかへ消えちゃったみたい。生じたものはまた滅するものである。つて。

だからどこかへ消えちゃったみたい。探してくれない？」

正「いいよ」

正「それね、捨てたんだ、僕が捨てたの」

雪「消えたんじゃないのね」

正「そう、何度言つても、書類をそのへんにおきっぱなしにするでしょう？キレイなほうがいいから、部屋はキレイなほうがいいから捨てた。少しは反省するかと思つて」

雪「しらないって言つたよね、どうしてボクがしってるの？つて」

正「そうだね」

雪「しらないって言つたのに」

正「ごめんね」

雪「悪いのはどっちだろう？」

正「(指をさすがおろしながら)もしかして僕かな」

雪「そうね(机の上にある書類をバサバサと部屋中にちらかす)」

正「でも、こうやって散らかった部屋にいると自分がどこにいるのかわからなくなってくるんだ。右も左も後ろも紙の山で、もしそれが小説かなんかの物語が書いてある紙の山だったら、まだいいけど、それはボクにはなんの関係もない数字とか記号とかばかりで埋め尽くされてる。その紙の山にはどこを読んでも登場人物がいなくてしょう?そう考えると、この部屋には風景がなくて、ただボクは部屋の中でふわりと漂っているだけのよう感じて。そんなボクを窓の外から見ているもう一人の分身のボクが見てるように感じて。もう、本当のボクはその部屋のなかにいるのか、窓の外にいるのかわからなくなってくる。だから片付けようかなとも思うんだけど、雪ちゃんが散らかした紙の山を触っても、その感覚は窓の外にいるボクの手にはしかないような、そんな感じ、わかります?」

雪「そこ(正に聞くように)」

正「どこ?(雪に聞くように)」

雪「松田くんにはそういうところがあるのね。最近夜中に部屋のなかをうろろ歩きまわってる」

正「うそだあ」

雪「ほんとよ、今朝だつて5時頃かな、うろろしてた」

正「うそだよ、そんなの」

雪「寝ぼけて自分で印したんじゃない?」

正「?」

雪「カレンダー、この丸、明日」

正「そんな記憶ないよ」

雪「ねえ、明日なにがあるの?」

正「だからしらなくて、ボクじゃないよ」

雪「覚えてないだけで、そうなのよ。自分がしらないうちに、自分がしらないことをやってる、なんか楽しいかも、そういうの」

正「夢遊病みたいなやつ?ぼくが?まさか。ホントにしらないんだ、なにも覚えてない、今朝部屋をうろろしてたなんてしらないよ」

雪「でも、よく見て。この丸。これはなにかの間違いでつけられた丸じゃない。

ほら、見てよ、この力強く、はっきりとした、意思をもった丸、この日、絶対に明日！絶対にこの日だけは！って、そんな丸よ、これは」

カレンダーの丸をじつとみつめる二人。

正「雪ちゃんがつけたんじゃないの？」

雪「…」

正「いや、だから、松田さんが。そうなんですよ？ぼくを騙そうとウソついてる？」

雪「米からは米、麦からは麦が生じて、米から麦、麦から米の生ずることは絶対に無いわけ」

正「うん」

雪「方程式で説明すると、体積 $<$ $>$ 程度の体積要素で観測すれば、この部屋では、ある瞬間には一個、次の瞬間にはゼロ個、また別の瞬間には一個。で、それは決して不特定で増加したり、減少したりすることはないわけ」

正「…うん」

雪「そこ」

正「そこ、うん？」

雪「またわかってないのにうんって言った」

正「うん、うん、うん（雪にちかづく）ごめんね」

雪「夢は見るほう？」

正「どうか」

雪「なんで？うんって言わないの？」

正「見ないかなと思って」

雪「夢くらいみなさいよ」

正「寝付きがものすごくいいんだよね、ぼく」

雪「ほんとにどんな夢もみないの？物語になつてなくてもいいのよ、なにか一瞬の風景でも、もしくは実体のよくわからない残像でも、なにか形式のない影のようなものでも？たとえばほんのちよつとした、意識をわずかな時間横切っていくだけのような夢、も？」

正「…見ない、かな」

雪「夢を見ないなんて、やっぱりおかしいと思うの。もしかしたら、松田くん

が現実だと思ってることの一部は、ホントは眠っている間に見てる夢で、でも本人には眠っているという意識がないから、それを夢だと脳は判断しない。普通の人の夢の記憶はおぼろげですぐに忘れられたり、あるときに不意に蘇ったりするものだけど、松田くんの夢の記憶ははっきりと鮮明に脳裏に刻まれるから、それを現実だと脳は判断して、だからその脳の反射作用が体を動かそうとするのかも。でも当然意識はないから、ふらふらと部屋のなかを歩いてみたりする。そしてカレンダーのある日付に丸をしてみたりする」

正「(カレンダーの丸を見つめて) してないよー、してないって、こんな丸」

雪「なにかあるのかもしれない、明日、これはなにかのお告げかもしれない、明日！明日！」

正「なんか怖くなってくるじゃない」

雪「ねえ、ビデオで撮ってみない、松田くんが寝てるよ。松田くんが明け方にむくりと起きて、部屋をうろろするところが撮れると思うの」

正「いやだよ、もう今日は寝ない。起きてほしいんでしょ？そんなこと言われたら寝れないよ」

雪「だめだよ。だって、明日は予定があるのよ、夢のなかの松田くんには大切な予定があるのよ、明日」

正「もうドタキャンする」

雪「いいから、寝るの、早く、寝なさいっ！」

正「無理だよ、ぜんぜん眠くないもの！」

雪「寝付きはいいほうだって言ったじゃない。さあ寝て！ビデオをまわしておいてあげるから」

正「いや、無理だって…！(雪、正のみぞおちに、どすりとパンチ。正、ぐったりその場で横になるが起き上がり、ちらかった部屋を片付けるながら)とにかく目を閉じることです。ほら、そうすれば、あらゆるイメージのなかに飛び込んでいけるでしょう。目を閉じてみる。目を閉じると、そこには暗闇があるでしょう。いつだって、暗闇はすぐそばにあるのに、ただ、こうやって目を閉じればいいだけなのに、ほら、またそうやって目を開けようとする。閉じて、閉じて、寝なさい。目を閉じて。はやく。はやく寝なさいって母親にもよく言われたよ、でも、今は、眠りたくないんだよ、そう眠りたくないんだよ(紙を集め続ける)」

雪「(少し笑う) いいから眠って、とにかく人は独りで、決して両者を同じで
あるとすることは、出来ないってこと、例えば母と子でも、夫婦でもね、人
は同じではないってことよ、明日、日曜日だから明日ちゃんと整理整頓し
よう、むこうむこう(正をおす雪)とにかくもう今日は寝て(雪はけよう
とする)」

正、この雪の台詞が終わるまでに床にあった紙を机にあげる。
机横に来た雪につきつぎに紙をわたしてゆく。

正「無理だよ、ずっと起きて考えていたんだよ」
雪「なにを？」

正「松田雪ちゃんのことを」

雪「バカじゃなのに、そんな考えてどうするの？」

正「いいんだ」

雪「そんなことしても」

正「いいんだよ、ただずっともうこうして考えているだけで」

雪「ずっとここにいるつもり？」

正「そうしたいんだけど」

雪「そんなの無理だから」

正「いや、無理だって、無理だよ、ずっと起きて考えていたんだよ」

雪「なんで？」

正「だから、松田雪ちゃんのことを」

雪「だから、バカじゃなのに、そんな考えてどうするの？」

正「いいんだ」

雪「そんなことしても」

正「いいんだよ、ただずっともうこうして考えているだけで」

雪「ずっとここにいるつもり？」

正「そうしたいんだけど」

雪「そんなの無理だから」

正「いや、無理だって…！」

雪「無理じゃないよ、いい夢みてね」

正「みないよ、夢なんて、みないよ」

雪「夢くらいみてよ」

正「だからわかかってないんだよ！わかかってないんだよ、そこらへんにバラバラとただ写真とか書類をどこにでもおいているような人だったものね、もう、全然わかかってないんだよ！あちこちにおいててさあ、写真もフレームになんてしなかったでしょう。写真フレームは写真を大事に思っただけ飾るものだから、フレームにいれないでそのへんにバラバラおいておくような感じじゃないはずなのに、いつでもさあ、どこにでも置いてたよね。書類も写真も、大事なものは残るのにさあ、そんなの誰も気にしないとか言ってたでしょう。大事な写真はちゃんとフレームに入れて飾るんだよ、フレームにいれてこそきちんといれて残るんだよ、フレームにいれてこそその一枚の写真なんだから（すべて過去形で言う）」

雪「あのさあ、誰だった？あの携帯にはいつてた女の人」

正「誰って、メール？秘書の沢木さんだよ」

雪「秘書の沢木さん」

正「うん、なんか子供ができたから産休の相談に」

雪「誰の子供？沢木さん結婚してないよね」

正「してないけど、誰のって知らないよ、彼氏じゃないの」

雪「浮気したでしょう」

正「しないよ」

雪「私がいなくなるからって新しい人生はじめようとしてるでしょう」

正「うん、あつ、ちがう、うんじゃない、産休かあと考えてて寿退職してもらわないとやっぱ無理かなとか考えて、うんじゃない、うんじゃないよ」

雪「私がいなくなったら、すぐに新しい人生を他の女と始めるなんてゆるせないよ、ひどいよ、私をいなかったことにするんでしょう」

正「しないよ」

雪「するね、絶対する」

正、椅子2脚を後ろにさげ、雪紙を後ろに持ってゆき、机を後ろに運ぶ雪、正。

正「しないよ、そんな簡単に新しい人生なんて始められないよ」

雪「でも独りになったらどうするの？」

正「やめてよ、独りになるのなんて考えられないよ」

雪「松田くんは独りは耐えられないよ」

正「耐えられないよ」

雪「でも最後は独りだよ」

正「やめてよ、怖くなるよ」

雪「じゃ一緒にいく？」

正「どこに？」

雪「もういいや」

正「どこに行くの？どこか行きたいところあるの？」

雪「ないよ、別にどこにも行きたくない」

正「行こうよ、雪ちゃんの行きたい所に僕も行きたいよ」

雪「いいのどこにも行きたくないから、松田くん新しい人生を初めて」

正「なに言ってるんの、ほら書類は全部書齋に持って行って」

雪「うん、わかった持っていく」

正「うん」

正、机の上に横になる。

雪「さあ寝て、ビデオをまわしておいてあげるから」

雪、舞台からはける。(衣装・雪案内人の服に早替える)

正「うん、寝てる所なんて撮らないよ！うん」

映像 〇〇個の家々の明かりが爆音とともにつき、そうして消えて雨の音になる。家の上には雨がふっている映像が流れる。

正「本当に自分が眠っている間になにかしてんのかな？怖いよ、撮ってみようかな？やっぱやめようかな？やっぱ寝ている姿を撮ってみよう！もちろん、夢が映るわけではないけれど、眠っている間の世界が見たかった。記録したかった。気になった。暗闇にはいったいなにが映るだろう。たぶん、どうせ撮ったところで、たぶん、やっぱ眠っている自分が映ってい

るだけかもしれない。こんなふうには、(寝る)寝相はよく、どこも乱れず、まっすぐとよく眠る。(起き上がり、寝ていた自分をみるようにして)ほらね、まっすぐに寝てる(モニターをみる)けれどもよく見ると、それは自分ではないようにも思えた」

雪は黒い服に着替えて印象がちがう。

まるで雪ではないような口調で話始める。

雪「とにかく目を閉じることです。ほら、そうすれば、あらゆるイメージのなかに飛び込んでいけるでしょう。目を閉じてみる。目を閉じると、そこには暗闇があるでしょう。」

正「やっぱり眠れないよ、無理だつて(雪を抱きしめる)」

雪に抱きつく正。

雪「ちよつと、はなして、気持ち悪、はなして、はなしてよ！(ふりきる)」
正「・・・(正の抱きつきが中途半端で気持ち悪いのでとにかくしつかり持つ)」

雪「誰よ、誰なのよ、あんたになんか会った事もないし、みたこともないわよ、

なんか、もう、最悪、やめてよ(すぐに振り切り、衣装をととのえながら前に歩く)」

正「・・・」

雪に投げ飛ばされた正は気絶でもしたように眠っている。

雪、999個の家のセットのなかを規則正しく歩く。

映像、一件だけあかりがつく。

正、突然目をさまし、雪をみる。

正「雪ちゃん、どうしたんだよ、なんでそんなところに」

映像、家の明かりが一つだけついている。
雪、その家をさす。

雪「この一軒だけついている明かり、なにに、なににみえますか？」

正「なに言ってるの？」

雪「ほら、これ、ほら（光る家をさして）なにに、なににみえますか？」

正「家、同じ家（〇〇〇個の家のセットのなかにはいる）」

雪「だめ、だめ、目をあけてみてるから、家にみえるんですよ、さっ、ほら、目を閉じて」

正「だって、目を閉じろって、なにに見えますか？って、おかしなことを言いますね」

雪「おかしくないですよ」

正「あれ？おかしい？目を閉じてみる（やってみる）どうやって、なんにも見えない、みえるわけじゃないじゃん目閉じてるんだもの（笑う）」

雪「（笑う）おかしなことを言いますね目を閉じてみろって言っておきながら、

なにかみえますか？だなんて！おかしなことを言う人だと思ってるでしょう？ええ、まぶたの裏でみないと、みえませんよ。まぶたの裏に映っているものをみるのです」

正「まぶたの裏？」

雪「ほら、しつかり閉じて、みてくださいよ、この家、この明かり。ここにある家はすべてちがうものだと、そう思ってみてくださいね」

正「同じような家にみえますけど」

雪「おかしなことを言いますね（笑う）」

正「おなかしなことを言うね（笑う）同じような家にどうみてもみえますよ！」

雪「はじめまして、あなたのご両親のお友達です」

手を正にさしだす雪。

正、雪の手をにぎる。

正「はじめましてじゃないよ、長い間ずっと一緒にいたでしょう！思い出し

て」

雪「いえ、いえ、私はあなたとは初めてお会いするので、両親にはお会いした
ことありますよ」

正「なに言ってるの？長い間ずっと一緒にいたでしょう！思い出して！」

雪「なにそれ（笑う）」

正「笑うなよ！（怒る）」

雪「だから、私はあなたと初めてお会いしますから」

正「じゃ、いいよ、両親の友達であつても、僕の友達ではないから」

雪「いや、いや、友達ですよ」

映像、900個の家がひとつづつついてゆく。

正「態度に腹がたち言い返しました。（いいですか、友達なんかじゃないで
すよ！雪ちゃんじゃありませんよ、あつ松田さん」

雪「誰？それ？松田さん？」

正「いい僕たちは、長い間、僕は一緒に暮らしてきたんだよ！」

雪「だから初めてお会いしますから」

正「じゃ、知らない、友達でもなんでもない、あなたとはね。それに僕には、
どれも同じようにみえますよ、屋根も玄関も窓も形も、サイズだつて、高
さだつて、なにもかも同じに。（足元の家をひとつ手にとり）ほら、この
家も、あの家も、こつちの家も、すべて同じようにみえますよ」

雪「同じに見えるだなんて、違うでしょう！ほらつ、あなたはそうやっていつ
も目を開けてしまうから。目を閉じてみてください。ちがうですよ。」

これ、全部違うんですよ。ほらつ、一軒だけ光っているでしょう、この家
は一軒だつて同じものはないんですよ。ようするに、すべてが一点で、全
てが一点なんです。私は長い間、家のセールスをしてきました。そこに
住みたいと思う人のために。そこで育みたい家族のために。家は人生で一
番高い買い物ですから、気を使いますよセールスするのに」

正「セールスねえ」

雪「はい、セールスが私の人生でしたから」

正「大変ですね、家のセールスって、あんな家がいい。こんな家がいい。庭付

き。駐車場付き。駅のそば。公園があつて、閑静で、丈夫で、新しく、地震に強く、できれば見晴らしもよく、日当りもよく、これから生まれてくる子どもたちのために、私たちの老後のために、できるだけ広くて、それでいてお値段お安く、なにかと便利で、だつて一生で一番高い買い物ですから、良いものをつて、売る時はいいように言うんでしょね。なのに、なんで皆同じような家をみんな買うんでしょね」

正、話を聞いていたが長いので椅子に座りますというジェスチャーを永遠に繰り返す。

雪「まあ、そうなんですよ。なにがいい、あれがいい、こうしてほしいと言うくせに、結局はみんな同じような家を求める。そこに住む人々は、それぞれ違うのに、同じような家を求めるものです。(明るく) 不思議なことに家を買いたいと思つている人は、みんな家がほしいと思つているんです。だから、私の仕事は簡単です。(暗く) 同じような人たちに同じような家を買えばいいのです」

正「街は同じような家ばかりですからね」

雪「(明るく) 皆さんに、同じように売ればいいのですからね」

正「楽な商売ですね」

雪「でもね！(自分でも忘れていたことに気がついて) ほら、そこに(足元にある一軒の家を指差して) ただ、そこに、ほらっ、(正がどこ？どの家と探しているのをここですよという感じで) ここで、ほら！こうして光つているこの家は、私が売らなかつた家なんです。」

正「一件くらい売れないこともありますよ」

雪「(怒る) 売れないのではなく、売らなかつたです。何千、何万もの家を数えきれないくらい、同じように売つてきましたけど、その家だけは売らなかつた。その家だけは。(家にちかづく) だから違うのですよ、(他の家とはちがうことを強調) 同じような家にみえてもちがうんですよ。この家は売らなかつた、セールスしなかつた家なのです」

正「どうして売らなかつたのですか？」

雪「ある日、ひとりの老女が家を買いにきました。もう先が長くない老女が家

を買うなんて、と私は思いましたが、3年でも二年でも、いや一年、もしくはひと月、いや、たったの1日でも住めればいいとその老女はいうので、私はこの家をご紹介したんです。すると老女はこの家の素晴らしい所をあげて下さい、と私に聞きました。私はいつも紹介するように、家をご紹介しました。」

家の周りを全速力で走りながら。

正「庭付き。」

雪「駐車場付き。」

正「駅のそば。」

雪「公園があつて」

正「閑静で」

雪「丈夫で」

正「新しく」

雪「地震に強く」

正「できれば見晴らしもよく」

雪「日当りもよく」

正「これから生まれてくる子どもたちのために」

雪「私たちの老後のために」

正「できるだけ広くて」

雪「それでいてお値段お安く」

正「なにかと便利で」

雪「だって一生で一番高い買い物ですから」

正「僕も家を妻と買う時は考えましたよ」

雪「ゆつくり見て、納得のいく買い物をして下さいね。と老い先短い老女に丁寧に言ったのです。」

正「うん」

雪「老女は「私はこの家の素晴らしい所をあげてみて下さいと言っているのですよ」と言ったのですね。だから、そう言う老女の顔をじつと見返して、私はしばらく考えました。この家の素晴らしいところ？」

家の周りを全速力で走りながら。

正「庭付き。」

雪「駐車場付き。」

正「駅のそば。」

雪「公園があつて」

正「閑静で」

雪「丈夫で」

正「新しく」

雪「地震に強く」

正「できれば見晴らしもよく」

雪「日当りもよく」

正「これから生まれてくる子どもたちのために」

雪「私たちの老後のために」

正「できるだけ広くて」

雪「それでいてお値段お安く」

正「なにかと便利で」

雪「だつて一生で一番高い買い物ですから」

正「僕も家を妻と買う時は考えましたよ」

雪「ゆつくり見て、納得のいく買い物をして下さいね。と古い先短い老女に丁寧に言ったのです。」

正「うん」

雪「老女は「私はこの家の素晴らしい所をあげてみて下さいと言ってしているのですよ」と言ったのですね。だから、そう言う老女の顔をじつと見返して、私はしばらく考えました。この家の素晴らしいところ？」

正「ないですよ、もうこれ以上」

雪「いや、セールスマンとしての誇りがあります。『素晴らしいところはこれ以上ありません』とはいくらなんでも言えないでしょう」

正「でもこれ以上に素晴らしいところなんてあるんですか？」

雪「欲ばかりでしょう、これ以上素晴らしい所なんて、嘘つくわけにもいかな
いし、と考えている私にむかつてその老女は言うのですでした。」

正「なんて？どんな家が欲しいって？」

映像、音、突然電車の音が流れる。

家のまわりにひかれたプラレールのおもちやの電車が小さな家のまわりを動きはじめた。その、電車にはカメラがつけられ、〇〇〇個の家のなかにたつ雪と正の姿をとらえながら街をまわっている映像が、後ろのスクリーンに映し出される。

雪「えー」老女がダメなのね。甲殻類アレルギーだから。とくにね、カニをねカニをたべること」老女は私に手をみせて「ほらっ、こちらへんに、なんかブツブツがでてきて大変なことになるの。とにかく老女は、「カニの身はいいのよ。身は。どうも甲羅がね、悪いらしいのよ。旅館なんかいくとよく出るでしょ。甲羅つきの。ほら。バキッてわって。割ると甲羅の汁が飛ぶのでしょうね。それが肌につくと、もう、これ、ぶつぶつ、かゆくて、だから甲羅を割るのはあなたの仕事でしょって、いつも言っていたのに。なのに夫は（正が老人ふうに言う）「いつも甲羅つきのカニが食べたい」

雪「って言うんです。いつも甲羅割るのめんどくさがるくせに。あの人亡くなる前の晩も、あの人、言うんですね。」

正（老女の旦那のように）「最後にカニが食べたいなあって。甲羅付きの。それで最後におまえに甲羅を割ってもらいたい。おまえはいつも俺に甲羅を割らせてきたなあ。いつもおまえはおいしい身ばかり食べて。最後に甲羅付きのカニが食べたいなあって」

雪「言うのよって、老女は、だから、その、「できれば食べさせてやりたかったけど、私はアレルギーだから、だから無理なのよ」って言ったら」

正「そうなんだ、知らなかったなあ、いまのいままでしらなかったよっ、君が甲羅アレルギーだったなんて」

雪「て、あの人言うんですよ。いつしよになつての〇年以上もなるのに、私がアレルギーだつてことしらなかっただなんて！（老女ふうに言う）「じゃあ、あなたはいままで私があなたに甲羅をわらせていたのは、ただ私が面倒くさがつてつて、思っていたの？そう私があなたの前にあの人は眠ってしまったわ。そしてそのまま、そのまま死んでしまったの。いま思えば最後にカニを食べさ

せてやりたかったなつて。アレルギーだろうと、ぶつぶつが体中に出来ようと、私が甲羅を割つて、カニを、カニを。」私は老女の話を聞きながら、ずっと考えてました。この家の素晴らしい所とそのカニとの関係について。もしかしたら台所のことをいってるのかなあ？毎晩でもカニをボイルできるように、広いキッチンがあるかどうか聞きたかったのかなあつて。確かにこの家のキッチンは、どうでしょう。可もなく不可もなく。それでも思い出によって家の捉え方は人それぞれですから、きっとこの家のキッチンでもご満足していただけるのではないかと思います。たとえこれがありふれたただのキッチンだとしても使えば、満足していただける形です」

正「満足！（怒る）本当にこれが満足の形なのでしょうか！普通の家の普通のキッチンが老女にとつて満足のいく形？」

雪「満足でしょう、満足の形ですよ、とは、私だつて言い切れなかったから、

セールスしてないんですよ！老女にとっては満足の形にはやはりなりえなかつたでしょうか：（しよげる）」

正「満足ですね、ああ、わかりましたこれが満足の形なのですね。座りますよ。

（椅子に座る）そうですか、何故？その老女には売らなかつたのですか？」

雪はだまつて、まっぐに家を見ている。

雪「何故売らなかつたのか？もう、わからないんですよ、年々めんどくさくなつていくことには変わりないのですがね」

正「忘れたんですね」

雪「一生のなかでたった一度セールスしなかつた家なんですよ。この家は、なのに、その理由がわからない。」

正「忘れたんですよ」

雪「時代が時代ですからね、新しい家は建たなくなり、家は売らなくて、セールスはもうやらなくていいと会社が」

正「会社のせいで売らなかつたのですか？」

雪「ちがいます。何故売らなかつたのでしょうか？」

正「知らないですよ」

雪「「必要ない時が、来るぞ！」（来るぞは誰か遠くの人に言うように叫ぶ、音響サイレンがなり響く）」と、早すぎる警告を出したことが原因だったのでしょうか？」

正「それも大切なことでしょう。早め、早めに手を打つべきじゃないですか」

雪「そうですね」「一度ヒツジの味を知ったオオカミは、それが忘れられず、また仲間を連れて襲ってくる」と言われているのだから、あそこで老女を甘やかすわけにはいかなかった」

正「（前の台詞にくいぎみで）オオカミ、羊食べるの？」

雪「食べますよ、ヒツジとか、少年とかオオカミに食べられてしまったじゃないですか」

正「最後に食べられるの？えー（きついよという感じで）」

雪「最後じゃないですよ、最後は、オオカミが仲間を連れてやってきて、村人たちを全員食べて終わりですよ。」

正「恐ろしい結末だよ」

雪「少年のようにウソをつく的な話ではなくて、将来危機への真剣な警告をバカにするな！的な話だったのですよ」

正「じゃ「来るぞ！」じゃなくて、「来てるかも！来てるかのよ！」って少年も叫べばよかったんだね」

雪「警告されたら、そうならないような手をすぐ打てばいい」

正「少年嘘つきじゃないよ、ちよつと言いつつ間違えただけでしょ」「来るぞ！」じゃなくて「来てるかも、逃げた方がいいかも」みたいな感じですよ」

雪「とにかく私は、転職して、中古の家に値段をつける査定の人になったのですよ。」

正「へー、そうなんですか」
雪「ある日、「あそこの家に（家をさす）住んでいた自分の母親が亡くなられ、

家を売却しようと思うので、みにきてください」とあるお客様に言われ、私は査定するために、その家に訪れました。テーブルの上にカニとビーニール手袋がありました。私はすぐにわかりました。」

正「その老女とはかぎらないでしょう」

雪「いえ、お写真をみせていただきましたが、その老女でした。心臓発

作で亡くなつたとご息は言っていました。見逃していたんですね」

正「なにを？見逃していたのですか？」

雪「老女はカニを食べたんですよ」

正「はい」

雪「アレルギーで食べれなかったカニを、一人残された家で、一人で食べたんですよ」

正「それで死んだと、心臓発作ではなく」

雪「そうやって見逃すんですよ、もし、あの時私が、家をきちんと老女にセールスしていたらそんなことにはならなかったもしれない」

正「そうかな？あなたのせいじゃないですよ、老女に新しい家を売る必要なんてないですよ」

雪「老女に売る必要はないと、あの時は、私もそう思ったのですが、家のセールスを辞め、中古査定の仕事について十年以上たつての出来事ですよ！わかりますか？悲しい、この状況、一人で亡くなった人のことを思って甲羅をこうやって、こうやって、わって食べたんですよ、ブツブツがでてアレルギーで苦しくなつて、かゆくなつて、うっ（心臓をつかむ、たおれる）」

正「考えようではないでしょうか。もしかしたら穏やかな死だったかもしれない、好きな人のことを思って甲羅をいいで、ね」

雪「そんな訳ないでしょう、甲羅をむいで独りで悲しく死んだ人のことを思いながら、まだ生きられるのに死んでゆくなんで、そうやってあなたは、いつも見逃す。これ、ほら、この家、憶えてないですか？」

正「憶えてないですか？つて、全部、同じ家にみえますけど、それに、同じような家にみえても、中身がひとつ、ひとつ、違うなんて当たり前ですよ、ね、住んでる人がちがうんですから、違いますよ！」

雪「それぞれに、ほら、ちがうから、見てこの家は少しトイレを大きくしたのですよ。結婚してもう5年はたっていた人でしょうか、奥様はまだ若いのに交通事故にあわれて車椅子にのつていたのです。車椅子のカノジョはいつもトイレに行くにもおおげさなことになる。はたしてこれはカノジョがのぞんだことなのか？動かなくなった足をプラプラさせながトイレに行く。これはとても大変なことだ、このトイレに行くという行為は本当に面

倒なことなんですと言っていたのですよ、だから、その人に少しでも楽しんでもらえるように、旦那さんはひとつだけオーダーをだしたのです。トイレを大きくしてくれと」

正「あつ、これ、この家」

雪「そう、お気づきですね。これはあなたのお母サンの家。そうあなたが幼いころ住んでいた家は私があなたの両親に売ったんですよ。だから、友達だつて言ったでしょう」

正「知らなかった。」

雪「ええ私が売ったんですよ。トイレに車椅子がはいるよようなサイズに大工さんをお願いしたのも私ですよ。あなたのご両親は言っていましたよ、家を買うと決めた！この子が大きくなるし、今のアパートではトイレが大変だから家を買うことに決めた！」

正「母親が使いやすいようにとつくったトイレが一番のお気に入りでしたよ、その家では」

雪「両親はまだこの家に？」

正「いや。その家は中古で売って、住みやすいマンションに引っ越したんです。」

3人家族だったけれど、私は家をでて、結婚をして二人で暮らしていますから」

雪「そうですか、今は誰かが住んでいるのですね」

正「ええ、でしょうね」

雪「どうですか？ベットタウンといわれる街で育った感じは」

正「(早口) ええ、ここが故郷かと言われるればなにもかも違うようも思います。が、私はここで育ったんだと思います。この街で、この家で、悲しみとか喜びとかいう荷物をつんで旅をしていたんだと、この同じようにみえる家々のなかで育ちました。でも、なにも、町の風景は憶えていないのです。いやいや、憶えてるよ、例えば、この家、これは(私) 僕が生まれた家です。これは昔の彼女(彼女)の家です。これは住み良い町の住み良い家です。これは流れ星が見えるという友達の家です。この家はまだ新しいです。この家は隣の家と同じではありません。この家は行方不明の猫を探しています。この家には子どもいない家族が住んでいます。この家にはよく吠える犬がいます。と、街のなかの、ある一部分は思い出せるので」

す。でもね、糸をひきちぎって泣いたんですよ、この街でね。変われない、どんなに変わろうと思っても、まあ、変わらないなって思っていたら糸にひっかかって、こけて、なんだよこれってひきちぎってるのに、糸なんて誰にもみえなくて、意味なくこけて、あつ、その人なりにひっかかたのつて笑われて、もう今日の卒業式はいいかなってことは、はつきり憶えていて、それがこの家と、この街の、だいたいの感じですよ」

雪「ひきちぎっても、ひきちぎってもとれなかったことが？この街の、だいたいの感じ？」

正「ええ、思い出です。この街の思い出です」

雪「なんですか？それ？あつ、流れ星。（前の○○個のセットに映像で流れ星が流れる）ほら、今、あなた、見逃したでしょう。流れ星、みてて、よくみていないと、見逃しますよ！　ほら、みて、流れ星、また見逃したでしょう」

正「あつ」

雪「ほらつ、見逃した。ほら、ほら、よくみてないと見逃しますよ。また見逃したでしょう」

正「すいません、また見逃してしまいました」

雪「だめですよ、私が流れ星ってなんてキレイだなんて言うと思っているですよ」

正「はい、キレイですよ」

雪「ええ、どちらかというと、だけどキレイだったなんて言いたくないんですよ、だから見逃さないでって言ったのに」

正「すいません。考え事をして」

雪「そうやって、流れ星をみたよ、キレイだったよ、という言葉だけが残ってしまつて、その言葉のなかだけの流れ星をあなたは信じて、ああ流れ星はキレイなんだつてことになるでしょう。ああ、もう、みんな、だから流れ星を見逃してしまうんですよ。キレイだったよつていう言葉だけが残ってしまつて、その言葉のなかだけに流れ星があるなんて、私はイヤなんですよ。なんでも、ほら、本物、流れ星、そう、実物をもってもらいたいですよ。本当に流れる星を、サア！つて、ほらつ、また、みてもらいたいですよ。だつて、ほら今もまた。流れたでしょ。ほら！ほら！」

空を見上げている正。

正「どこ？どこ？また見逃しました。流れ星はいつ、どこで落ちるんでしょうか？流れてどこにいくんでしょうか？セントポーリアという植物に聞いてみようと思います。セントポーリアって葉にほこりがたまりやすいって知ってましたか？葉の面積がこうひろくてホコリがたまりやすいっていう欠点があるのですが、花の色が変わるんです！すごいでしょう、昨日は黄色だったのに、今日は青、しばらく青かと思っていたらオレンジになるんですよオレンジから黄色に変わるくらいならまだ納得ですが、青からオレンジですよ！ねっ、ねっ、人間とよく似ているでしょう。毎日、毎日、少しずつ色が変わるんですよ。（椅子に座る。そこにある花を思い浮かべながらあらためて話し始める。）子供は、親が思うようには育たない。生まれ持った性格や様々な人との出会いによって、色を変えながら成長していくものでしょう。セントポーリアの花も明日は赤になるといいなと思っていたら、白になってたりして、赤を期待してて白って「ないなあ」と思ってしまうけど、自分の思うようにはいかないというか、ねえ、でも、どれほど色が違ってしまっただからといっても、親子でなくなってしまうわけではないから、言葉のなかにある、ああきれいな流れ星だったよ、と言うなかにある流れ星も、きつと本物なんでしょうね。本物も偽物も一緒なんですよ。親子のようにちがっても、まあ、結局は一緒ってことなのですかね」

雪「よく考えてみると、本物と偽物は違います。見たのと見てないのでは違います。いくら綺麗な画像をみても、それは本物ではない、この目でみたわけではないから、偽物は偽物のままで、ええ、違いますよ、言葉のなかにある流れ星綺麗だったねは本物ではない。偽物ですよ、それでも、あなたは見逃してもいいんですか？」

正「どちらかというと、見逃しても、まあ、べつに、それでいいかと」

雪「見逃してはダメですよ」

正「なんで、偽物を本物だと思えばいいんだからいいんですよ、それが本物だとしても見逃していいじゃないか」

雪「ほらみてその家、新しくあなたが買った家でしょう」

正「ええ、僕結婚したんです。この家で新しい生活を始めたんです。この家」

雪「今は独りで住んでいるんですか？」

正「いいえ、妻と一緒に住んでいますよ」

雪「嘘ですね」

正「本当です」

雪「あつ、流れ星！」

正「どこ？どこ？」

雪「そうやって見逃してばかりですね」

正「いいじゃないですか！嘘でも、嘘でも、偽物でも、いつか本物のなるんだ

よ、見逃したつていいじゃないか、それに、あなたも見逃しているんです

よ、ほら糸」

雪「そうですか？」

正「だつて、家は未来でなく、日々でしょう。朝が来て、夜が来ます。雨が降り、小鳥がさえずります。同じような形をした家売る人がいて、そしてそれを買おうとする人たちがいて、みな一様に自分の未来のために家を買おうとして、彼らは家を見上げながら、日陰を選んで、畏れを飲み込み、日々を生きてるわけでしょう。彼らが買ったのは家ではなく、家を建てる記憶でしょう、もしくはローンを払う記憶でしょう、静かな一日が終わる頃、そこにはただ日々があります。それが、僕にとっては大事な日々でした。この家は、新しく僕が妻と一緒に買った家なんですよ」

雪「じゃあ、もう寝ますか？もうすぐ朝になります。静かな朝、一日の始まりですよ、いや、まだしばらくは夜ですね。ああ、もうすぐ船が出ます。いや、まだ出ません。もうすぐあなたの順番ですね。いや、あなたはまだ選ばれてきえませんでした。もうすぐ誰かが助けてくれるでしょう。いや、私はここで祈るだけです。もうすぐ雨が降りますね。いや、きつと降らないでしょうね。あ、ほら、やっぱ朝がくる。だれかが東の丘で鬨の声あげて、やがて朝が始まり、腹の白い無数の鳥たちが空を覆い、草原（くさはら）を行く君に、急げと言う。それでもまだ、しばらくは時間があり、朝になるまえに夜が終わるのを私は待っています。もう朝はこないんでしょうか？このままずっと夜でしょうか？もうずっと暗いまま？ それともう夜がこないんでしょうか？誰かいませんか？ はじめからそこにいた人たちは答えてくれません。」

正はなにかから逃げるように走り、走り、そうして、生きた折れて眠る。

照明、暗転。

暗闇のなかで声が聞こえる。

正「ああこれは夢なんだと思うのと同時に、ああもう僕は死ぬのかな？いいままで生きてきて、死を近くに感じたのは2回だったなあ。一つは、交通事故で死んだばあちゃんのお葬式があった日のこと、そう、このことはよく憶えています。私が憶えているのは、前の日にわたしのためにつくっておいてくれたカレーをじいちゃんが食べるか？と聞いてきたことです。私のためにはばあちゃんがつくってくれたカレーを死んでしまったばあちゃんが今もまだいるように思いながら、おいしい、おいしいと食べたのです。その後、カレーをつくってくれたばあちゃんにおいしかったと言ってくるよと、家中をばあちゃんを探しましたが、みつからなくてじいちゃんにばあちゃんはどこにいる？と聞くと、ばあちゃんは空にいったんだよと言うので、5歳の私はなかにわにでて空をみました。その時、初めて流れ星をみたのです。あの時、あの瞬間は、見逃したりしなかったのに「あっ、流れた。流れ星だよ」と誰もいない中庭で一人叫んでいました。他のみんなは、その流れ星を見逃したようでした。交通事故で亡くなったばあちゃんの死に顔はみせてくれなかった。今だにばあちゃんが死んだことも信じられない一番遠くにある死。本当に死んだのか？二つ目は、夜店で買ったもらったブルーとピンクのひよこだ。買った夜にピンクとブルーのヒヨコは弱りはじめてどうにか生きてもらいたいと泣きながら訴えると、父親が寒いのがよくないというので毛布のなかにくるめて、小さな身体を指先でこすったり、息をふきかけたりするのだが、苦しそうに呼吸をしていて、もう、なにもしてあげられなかった。ブルーとピンクのひよこは私の手のなかで、あっさりと死んでいった。さつきまで、あんな苦しそうだっなのに、死んでしまうと安らかにさえみえた。涙が止まらなかつた。たった1日で死んでしまうなんて、ひどい、夜店の人を心から恨みました。それから夜店でているひよこの前は駆け足で通りすぎ、みないようにした。駆け足で店の横を通りすぎるたびに思い出す。私の手のなかで小さな

命。一番近くにある死。えー、死ぬ前に言っておきたいこと、えーっと人生には不愉快なことがたくさんあったなあ、だからもう不愉快なものも描かなくていいんじゃないか？と私が書いた木とみて小学校の美術の先生が言った。いいかあ、あなたのその言動が不愉快なんだよ。私はただ、ただ美しい木を書いたつもりだったのに、ずっと、先生に伝えられなかったけど美しい木を描いたんです、死ぬ間にこんな昔のこと伝えなくてもいいや、死ぬ時、きつと雪ちゃんが側にきてくれるかな？「もう雪ちゃんに会いたいよ、ありがとう両親に言っておけばよかった」誰もいない。こうして、ずっと座って、そうか、夢は死になつて、こんなふうになにもかも小さく、遠くなつて死ぬのか：マチガイナイア、マチガイダラケカモナア、疑わずにはいられないなあ、だつて、ばあちゃんもヒヨコも遠くても、近くても死んだんだもの：死ぬ時つて独りなんだなあ、側に来て手ひっぱつててくれないのかな？やっぱり、目をつむることは怖いなあと思ひながらも、でも、今寝ているわけだからもう、いいや目を閉じよう」と

突然、稲光があり、雨の音が激しくなる。

雪「(叫ぶ、早口) あー、あー、ダメだ、あー、あー、もうダメ、あああああ
あ、目をあげ、目をあけて下さい！ あとからサクサクと草原(くさはら)を分け入つてやつて来た人たちが、はい、と答えますよ。見上げれば月はもう半分くらいになつてしまつて、もうどうにもならないと君がつぶやいたとき、幕は上がつて、私はなにかしゃべらなくてはいけないことをする。でも私にはなにも語るべきことがない。それつても私は、いまこうして目を閉じて、なにかを話さなくてはいけない。私は、どこの誰だか知らない人が、その遠い誰かがつぶやいたその言葉を信じ、多くの人がまだその言葉を知らないことをいいことに、あたかもそれが自分の言葉であるように話し、あたかもそれが真実であるかのように語り、その言葉が本心に指し示す意味もわからぬまま、ごくわずかな共有者を求め、彼らとそれをした顔で話し、みなより多くを知っていることに徳を感じ、またそのことになんの疑問も持ち得ず、ただ未だ知らないものたちを笑い、いつしかまた新しい言葉を同じやり方で覚えては、それまでの言葉を失い、そのことにはやはりきずかず、あたかもそこに始めからいたかのよう

な顔をする。君はいなかった。始めからそこにはいなかった、君がやってきたのは、もうずいぶんあとになってからだよ。多くの人がやって来た、さらにそのあとからだよ。雨が降る。雨が降る。さあ、とにかく目を開けることです。ほら、そうすれば、あらゆるイメージのなかに飛び込んでいけるでしょう。目をあけてみる。目を開けると、そこには暗闇があるでしょう。いつだって、暗闇はすぐそばにあるのに、ただ、こうやって目を、ほら、またそうやって目を閉じようとする。開けて、起きなさい。目を開けて。はやく。はやく起きなさい。あつ、流れ星。ほら、今、あなた見逃したでしょう。流れ星、みてて、ヨークみていないと、見逃しますよ！ほら、みて、流れ星、また見逃したでしょう」

正、雪の台詞とにかく目を開けることです。で、セットをかえる。

前側、後ろ側を雪と交互に動きながら

正「見逃しました」

雪「ほらヨークみて下さい」

正「みるよ、（空をみあげながら）」

雪「ほら、みてないと」

正「みるよ！（雪をうるさいなという感じでみる）」

雪「ほら流れた」

正「どこ？どこ？」

雪「また見逃したの？」

正「また、見逃しました」

雪「じゃね」

雪舞台からはける（雪、パジャマに着替える。早着替え）

正「じゃ（手をちぎれるほどふる）さよならおじいちゃん、さよならおばあちゃん、さよならブルーとピンクのひよこ、さよなら美術の先生、さよなら、松田さん、さよなら、さよなら松田さん、さよなら雪ちゃん、さよなら、さよなら、さよなら（1分くらいはさよならを言い続ける）」

正はその手をちぎれるほどふり、机のセットが移動され、後ろにきているのでそこで、眠る。

正、突然、目をさます。

正「夢を、憶えておきたい、記憶に留めたいけど、やっぱり憶えてない。（眠る。しばらくして、叫ぶ）あー、あー！あれ？なんだろう？逃したか？いや逃げたか？見て、逃げたか？憶えてる！なんだっけ、えー、ここまで、ここまで、でてる、見逃したか！そう、見逃したか！（スタンドの明かりをつけながら）なにを僕は見逃したのかな？」

正、下手にはける。

舞台上は雨がふり、スクリーンには正と雪の映像がうつしだされる。（1分）

正着替えて下手からでてる。

正「とにかく目を閉じることです。ほら、そうすれば、あらゆるイメージのなかに飛び込んでいけるでしょう。目を閉じてみる。目を閉じると、そこには暗闇があるでしょう。いつだって、暗闇はすぐそばにあるのに、ただ、こうして目を閉じればいいだけなのに、ほら、またそうやって目を開けようとする。閉じて、閉じて、寝なさい。目を閉じて。はやく。はやく寝なさい。子供の頃そう母親に言われると、眠るのが怖くて仕方がなかった。眠ったままもう起きられないんじゃないかって想像したら、もう嫌で、目を閉じるのが嫌で嫌で嫌で仕方なかった。でも今、大人になった今、目を閉じてもあの時ほど怖くない。大人になった今、ベットに横たわれればすぐに眠りにつくことができる。もう特技と言ってもいいかもしれない。目を閉じるとすぐにぐっすり、ちよつとした特技と言ってもいいかもしれない。世の中には寝たくても眠れない人もいるっていうのに、僕は目を閉じたらすぐにぐっすり。その日起こった事を思い出すこともなく、明日の予定を思い返してみることもなく、ましてやふいに思い出される子供の頃のにがい記憶に苦しめられることもなく、夢をみることも、羊を数えることも、あらゆるイメージの中に飛び込むことも、なにもなく、ただ何もしな

いで、ただ眠りにつく。むしろ今、大人になった今、そうして気絶でもした様にすぐに眠ってしまうことに怖さを感じたりもする。横になるとすぐに意識が遠くなり、気が付けば朝で、部屋は明るく、昨日と同じ雨だ」

雪、着替えて椅子に座る。

雪「今日は雨ね」

正「帰ってたの？さつき夢をみたんだ」

雪「どんな？」

正「さつきまで、ついさつきまで覚えてたんだけど、忘れちゃった。ねえ、さつきからなにをみてるの？」

雪「近所の家が燃えてる。放火だよいや地震だよ」

正「つらすぎるよ」

雪「つらくて当然でしょう、あのね」

雪「いつも電話を切る時に相手が切ってからしか電話を切らないよね」

正「うん」

雪「そういう人だよね」

正「自分から先に切るのはちよつと」

雪「そうなんだ」

正「うん」

雪「そんな心配はいらないよ」

正「うん、そうだね」

雪「なんだか、いつも幻をみている人みたいだよね」

正「なんで」

雪「いつも「うん」って言いながら、遠くをみているような気がするから」

正「幻なんてみないよ」

雪「なんで、幻をみないなんて退屈よ」

正「退屈しないもん」

雪「相手が忠実な夫でいてくれるかどうか？わからないのに、夫を愛することができる？リスクをおかさないで、秘密を知ってるんだから！」

沈黙1 (燃えている音)

雪、立ち上がり

雪「地震よ！逃げて！逃げないと、はやく逃げ出さないと」

雪、椅子に座ると同時に火事の音が消えてゆく。

正「どんな秘密知っんの？」

雪「嘘、知らないの (笑顔) 毎日一緒にいるのに、あなたのことなにもわからないの」

正「聞いてよ、なんでも聞いてよ」

雪「じゃ秘密を教えて」

正「いいよ。ここだけの話にしておいてくれる？」

雪「うん、秘密だね」

正「そう秘密、雨がふると雨にぬれることなく生きていきたいと思ったりするんだ」

雪「傘させば」

正「ものすごい雨でどんなにしてもよけられなかったら」

雪「家からでないようにするの？」

正「そうかも、それがいいかも」

雪「いいわけないよ、やけくそだよ」

正「やけくそだよ、あれえ今日も雨だね」

雪「今日も雨ね、このまま雨でもいいかなって時々思うの」

正「えー雨にぬれないで生きていきたいんだけど」

雪「ずっと家に二人でいることができるでしょう」

正「そんなのあきちゃうでしょう？絶対無理だよ (バカにしたようにいう)」

雪「最悪だね (態度急変)」

正「なにが (馬鹿にしたように)」

雪「ムカつく、話かけないでくれる (怒ってる)」

正「うん、怒ってる？ムカつく」

雪「なんで？ムカつく」

正「夢をみたような気がするんだムカつく」

雪「どんな夢をみたの？ムカつく」

雪「女の子たくさんでてきた？ムカつく」

正「うん、娼婦みたいなムカつく」

雪「それ、ダメでしょう」

正「ムカつく」

雪「ムカつく」

正「うん、ちがう、ちがう嘘、嘘、ムカつく」

雪「私も、怒ったりしないでしょ、ムカつく」

正「ムカつく」

雪「ムカつく」

正「なんで、どうだろう？」

雪「夢だよ」

正「なんだ夢かあ」

雪「ねえ、私どんな名前だったか覚えてる？」

正「いいよ名前なんて気にしなくて」

雪「うかつだった」

正「ぬかったね」

雪「心に準備をしていたのに、自分の名前を思い出せないなんて」

正「混乱しただけだよ」

抱きしめる。ここは長く、抱きしめあうようにする。

正は雪を持ち上げ一周させる。

正、雪を抱きしめるが、正、そのうち力がぬけてどんどん床に眠っているようだ。

雪、それをどうにか支えようとするが、支えきれなくなる。

雪「どうしたの、ねえ、なに？なんで？」

雪の寝てしまった正をその場所におき、ゆっくりと反対側に歩き椅子に座る。

雪「また眠るの、よく眠るね」

正「なに？起こしてよ、ムカつく（客席をむく）」

雪「何度も起こしてるよ、コノ野郎（客席をむく）あれ？私、どんな名前だった

「たかな？」

正「うっかりだね」

雪「うかつだった」

正「思い出せない時は無理しないほうがいいよ」

雪「そんなたわ事で私を説得できないでしょう」

正「なんで、そんなにすべてが関係していると思うの？」

雪「すべてが関係しているから、毎日父親が死ねばいいと日記に書いていた二十歳ころの出来事は鮮明に思い出せるのに、自分の名前が思い出せないなんて」

正「気にしないでよ、思い出せない時はもうひとつの名前を思い描けばいいって」

雪「ハロルド、フランクリン（明るくかわいく）」

正「呼びにくいよそんな名前、なんでハロルドなのイメージと違いすぎるよ呼びにくいよ」

沈黙2（映像救急車）

雪、テーブルをみてる。

正雪をみている。

雪「テーブルが揺れてる」

正「つらすぎるよ」

雪「つらくて当然でしょう、あのね」

雪、正に抱きつく。

正、また力がぬけて眠る。

正「幻が訪れるのを待ちわびているのかな、一日の大半を眠りながら」

正、眠る。

雪「それもいいかもね、また眠るの？よく眠るよね。」

正「はやく」

雪「待って、待って」

正「いいから早く」

雪「待って、待ってよ」

正「はやく」

雪「待ってよ、待ってってば」

正突然起き上がり、反対側の机に走り始める。

正「未来は変えられる、無数の未来がありうる（大声で）大声で叫んでみる」

雪「びつくりするじゃない」

正「そんなほうがよい人生をおくられるって」

雪「いったい誰がよりよい人生を送るのか？なんて、誰にもわからないでしょう」

正「未来は変えられる、無数の未来がありうる（大声で）大声で叫んでみるといってよ」

雪「すでに未来を決めて、ただひとつの未来しか送らなかった人なのか？それとも、未来を見ないで、先送りしている人か？それとも、未来を不定して二つの人生を送る人か？」

正眠る。雪、正を起こすようにしながら

雪「ねえ、すでに未来を決めて、ただひとつの未来しか送らなかった人なのか？それとも、未来を見ないで、先送りしている人か？それとも、未来を不定して二つの人生を送る人か？誰が幸せなの？」

正「なに？誰が幸せなのかわからないよ」

雪「なんでわからないの？」

正「今日は疲れたよね、もうねよう」

雪「寝ないよ！」

正「もう寝ようよ、今日は疲れたよ」

雪「また眠るの、よく眠るね」

雪はもう先に寝ている。

正「あれ？寝ちゃったの」

沈黙3 (映像2ロケット)

正「ああ、もう絶対宇宙飛行士にはなれないって思ったんだよ」

正、雪をおこそうとしながら起きる。

正「つらすぎるよ」

雪「つらくて当然でしょう、あのね放火魔は私なの」

正「うん、うんじゃない、なに？」

雪「そこら中に火をつけろ！そうして逃げろ！って突然思ったの、自分の家が
火事になるだなんて思ってなかったのよ！ねえ、私のこと大事にしてくれ
るよね」

正「もちろん、大丈夫心配いららないよ」

雪「でも怖いだよ」

正「インターネットには人生の希望を入力すると、いろいろ答えをくれるよ」
雪「そんな答えいーらない」

正「答えは満足だよ。永遠の満足が得られるよ」

雪「そんな答えで、標本箱にピンで止められた蝶のような満足なんて興味ない
よ」

正「そうかな？それでも幸せはいいよ」

雪「幸せが続くかどうかなんて、そんなインターネットの答えでだせないでし
よう」

正「モデルだよ、ただの人生設計モデル」

雪「モデルだなんてあつてないようなものよ」

正「そうかなあ」

雪「小さい頃なになりたかった？」

正「宇宙飛行士」

雪「今は？」

正「なつてない、普通」

雪「でしょう、思った通りにはいかないのよ」

正「宇宙飛行士にはなれないって思ったんだよ」

雪「そうでしょうよ」

正「ある日、家から何千キロもはなれた所に行つて、ここに永遠にいることなんてとても僕にはできないなあつて、家に帰りたいなあつて、もし僕が宇宙に行つたら僕の家とは何万キロと離れていることになるでしょう。そのことを考えると、これ以上遠くに行くのは無理だなあつて、ああ、もう絶対に宇宙飛行士にはなれないなあと思うと、とても悲しくなつたよ」

雪「そうやって時間はすぎていくのよ、ムカつく」

正「どんなことをしたつて時間は止められないのかな、ムカつく」

雪「止められないわよ、ムカつく」

正「そうか、でもイメージすることはできるよ、時間のない世界を、ムカつく」

雪「それは美しくないよ、ムカつく」

正「そうかな？ムカつく」

雪「そうよ、美しくないし、その場のぎよ」

正「そうか、そんな人たくさんいると思うんだけどなあ、時間を止めて生きようとする人であふれてるつて、いうかさあ、でもどんなにしても時間はすすんじゃうのか」

雪「時間が止まっちゃつたら、ただの一度の日の入りも日の出もみないまま人生が終わっちゃうよ」

正「そんな人たくさんいると思うけどなあ、ムカつく」

雪「ただの一度もみないの？ムカつく」

正「うん、僕だつて日の入りはちゃんとみたことないよ」

雪「嘘！」

雪、後ろを振り返り。時計の音がカチカチとなるのを聞く。

机の上ののっている正を叩く。

正「本当、日の出はみたことあるよ、お正月にね、でも日の入りはみたことないよ」

雪「そんな人いるんだ、コノ野郎！」

正「いるよ、僕、よく眠るでしょう、それに、ほら街で育つたから、コノ野郎！」

雪「関係ないでしょう、コノ野郎！」

正「関係あるよ、なんか毎日一緒に、時間がほとんど動いてない気分になってただよ、様々な時間の経緯が一緒だなんて、あの子が大学に合格したって聞いたら、自分がいつのまにかその立場になっていて、少ししたら、また近所の後輩がそうなっていて、いつのまにか、いつのまにか毎日が一緒に、時間が止まったようにイメージするんだよ、コノ野郎！」

雪「それと日の入りをみたことがないとは関係ないから、コノ野郎！」

正「関係あるんだよコノ野郎！、こう？わからないかな？コノ野郎！」

雪「なんで、すべてが関係していると思うの、コノ野郎！」

正「関係あるんだよコノ野郎！、みんなは全部を見ようとしなから、チラリとしかみないから、横切る風景をかすめて同じ方向にしか進まないんだよ、それをやめて景色を楽しめばいいんだよ、家のなかにいるとなんでもわかる気がするんだ。窓の外に広がる世界のことだ」

雪「（低い声で睨みながら）時間が無限にあるとでも思ってるの？関係あるんだよコノ野郎！、時間が無限にあるとでも思ってるの？（正をゆさぶりお越しながら）」

正「あれ？ないかな」

雪「あのね」

正「はい」

雪「あなたも年をとって、私もとる。それでいいじゃない」

正「年なんてとりたくないよ、よく眠る人って年とらないって」

雪「（机をたたき）止まらないから、暗闇にも速さはあるのよ」

正「くらやみの速さはどのくらい？」

雪「夢もみないような人にはわからないわよ」

正「光よりはやいの？くらやみのほうが速いの？」

雪「くらやみ速度についていけないからみんな眠るのよ。」

正「くらやみ速度についていけないってことは眠っていたら時間は止まってる」

雪「時間は止まったりしないわ」

正「やっぱ眠ってても時間は進むのかあ」

雪「また眠るの？時間は進んでるよ、暇だよ、起きてよ、よく眠るね。」

正「なに？起こしてよ」

雪「何度も起こしてるよ」

正「ああもう、今日さあいろいろさあ」
雪「なに？」
正「ああ、もう」
雪「なにかあったの？」
正「ああ、もう家からでないようにする」
雪「それもいいかも」
正「いいわけないよ！でたらめだよ」
雪「でたらめだ」
正「でたらめだよ、ああ、もう」
雪「ねえ、カステラに包丁をいれようか？」
正、雪の髪をさわる。
雪「たくさんもらったから」
正「カステラに包丁をいれてくれるなんて、なにもかもが愛せる瞬間だよ」
雪「大丈夫？」
正「なにが？」
雪「将来への不安とかあるの？」
正「大丈夫（正、眠りながら）」
雪「何故？私のことが好きなの？（正が眠りかける途中に言う）」
正「ふとそんな気になったからかな？」
雪「ふと？」
正「いや、ずいぶん前から気にはなってたんだよ」
雪「なにそれ？もつといろいろないの、賢そうにみえた、とか、尊敬できたとか」
正「確かに、成績よかったよね」
雪「高校生の時数学教えてあげたでしょう」
正「でも、文系ダメだったよね」
雪「意味がわからないもん、この人はどう思ったでしょう？って意味がわからない。だいたい正解があるの？」
正「10人中9人はこう思いますよってことだから」
雪「なんでどう思おうと自由でしょう、くっそう」
正「雪ちゃんはなんで僕と結婚してくれたの？」
雪「便利だなあと思って」

正「便利？」

雪「いや、その松田くん、釘をうつのが好きだったでしょう？」

正「大工が趣味だからね」

雪「それまで、松田くんほど釘を打つのが好きな人をみたことなかったの、松田くんの幸せは道具箱を持って家中を歩きまわって、どこか修繕するところないかな？つて探しまわることでしょう」

正「この椅子も机も僕がつくったからね」

雪、椅子をたおす。

正、椅子をみて幸せそうに

正「丈夫だね」

雪「そこ！例えば椅子を壊しても、それに感謝して、なおすよって、楽しそうでしょう」

正「まあね、趣味だから」

雪「そこ、そこいいと思うんだよね」

正「なにが？」

雪「もし、私がドアノブとか壊したらどうする？」

正「修理するよ」

雪「どう思いながら？」

正「なおすの楽しいなあって」

雪「そこ、私がドアノブを壊しても感謝されてるのよ」

正「まあ、楽しいからね、なおすの」

雪「ほら、カレンダーこの日にマルしたの私がしたんだよ」

正「なんで！してないなんて嘘いったんだよ？（真剣に怒る）」

雪「だって、書類捨てたのに知らないって嘘ிட்டたでしょう」

正「うん、でも嘘ついでごめんって謝ったよね」

雪「ごめんね、忘れてたんだもの、今思い出したの」

正「なにかあるの？（なげやりに怒る）」

雪「なんにもないの、カレンダーにマルしてみたのよ、未来がどうなるかなんてわからないじゃない。だから」

正「だから」

雪「わからないじゃない、誰も未来がどうなるかなんて、だから、カレンダー
マルをつけたのよ、いいでしょう！バツじゃなくてマルだよ。」

正「いいねマル。(まだ写真縦は持たない)」

雪「いいでしょうマル。ねえ、どこに行きたい？ずっと家に閉じこもって仕事
してただから発散したいでしょう？」

正「映画でも観に行く？」

雪「いいよ」

正「やっぱ他の事にする？」

雪「どうして？」

正「だって、映画でもいいけど」

雪「なに？」

正「一緒の席に座ってみようよ」

雪「映画って一人で観るものじゃない？」

正「映画館、人たくさんいるじゃん、一人じゃないじゃん」

雪「誰か横にいるって思うと気になるから」

正「満員だったらどうするの？」

雪「満員時はしょうがないよ、松田さんに横に座ってもらおうよ」

正「フー！僕でいいの、横座って(横に座る)」

雪「いいよ、満員だったらね、満員じゃない時は、ひとつ席をあけて座って
ね」

正「えー、いいじゃん横に座っても」

雪「じゃ映画の途中で話かけるのはやめてくれる」

正「なんで？話かけるのダメ」

雪「ダメだよ」

正「じゃ、話かけないよ、雪ちゃん」

雪「あつ、私の名前だ」

正「そうだよ」

雪「そうだね」

正「思い出した？」

雪「うん、今思い出した。そんな名前だったね」

正「そうだね」

雪「自分の名前も思い出せないなんて病気だね」

正「うん（空をみあげる）」

雪「なにをみているの？」

正「電車だよ」

雪「電車をみてるの？」

正「うん」

雪「なんで？」

正「乗りに遅れてしまあったよ、乗りに遅れてしまあったよ。（歌う）理由なんてないよ」

雪「なにをみているの？」

正「星だよ（空をさす）」

雪「見上げてるの？」

正「うん」

雪「なんで？」

正「星を眺めてるから、見上げないとみれないでしょう」

雪「天を眺める必要があるの？」

正「星をみてるからね」

雪「なんで星をみているの？」

正「理由なんてないよ」

雪「本当じゃないの？」

正「ない、いや？あるかな？」

雪「ほら、理由あるじゃん、教えてよ」

正「決してあざむくことない約束はどこにあるのかな？努力の規則とその報いはどこにあるのかな？正義はどこにあるのかな？慰めはどこにあるのかな？そのときに天を眺める必要があるのかな？」

雪「天を眺める仕草は500年以上も前から人がやってたんだよ、私達、今500年前の人と同じ仕草をしてるね」

正「そうだね、悲しい時、混乱した時、後悔した時、人は星を眺めるだね、みちびきの星を求めている。それが理由なのかな」

雪「見上げる仕草」

正「見上げる仕草」

雪「あのね、心配しなくていいよ」

正「こういう時に心配しなくて、いつ心配するんだよ、夫婦なんだから」

雪「そうね、私がいなくなったら、新しい人生を初めてよ」
正「簡単に新しい人生なんて始められないよ」
雪「でも独りになつたらどうするの？」
正「やめてよ、独りになるのなんて考えられないよ」
雪「松田くんは独りは耐えられないよ」
正「耐えられないよ」
雪「でも最後は独りだよ」
正「やめてよ、怖くなるよ」
雪「じゃ一緒にいく？」
正「いけないよ」
雪「そうだね」
正「怖い」
雪「怖いよ」
正「僕も」
雪「私が死んだらどうするの？」
正「死なないでしょう、僕より先になんか死なないでしょう」
雪「わからないよ」
正「やめてよ」
雪「今まで身近な人死んだことないの？」
正「ある。ばあちゃん、突然交通事故で、雪ちゃんもある？」
雪「ある。大学の時友達だったヤンデバ君って子がいたの、ラグビー部で」
正「つきあつてたの？」
雪「つきあつてなんかないよ」
正「好きだった？」
雪「そんなんじゃないよ、ただの友達（怒ってる）」
正「わかつた友達ね、うん」
雪「ある日、たまたま自動販売機でジュースを買うのが一緒になつた」
正「うん」
雪「あの時急いでて、財布を忘れて」
正「（笑）雪ちゃんってそういうところあるよね」
雪「なに」
正「いいなあと思って」

雪「なにそれ」

正「それで」

雪「ヤンデバ君がなにしてるの？って言って、ジュースをおごってくれたのよ
「気にするなよ、次おごれよ」ってそのままかけていったのよ。次の日ヤ
ンデバ君が線路に落ちた人を助けようとして電車にはねられて死んだって
聞いて」

正「その話聞いたことある。雪ちゃんの大学ラグビー強かったでしょう？」

雪「そうかな？」

正「強かったよ、その人二十二歳の日本代表候補選手の人だよ、ニュースにな
ってたよ」

雪「そうかも、日本代表とか言ってた。あの時！おごってもらったジュースを
机の上においたままにして、なかなか捨てられなかったのに、いつのまに
なくなつて、次おごることもなくて、あの時！ヤンデバくん、確か、背
番号十番をつけていたと思うんだけど、背中がキラキラ光って、このまま
光のなかにかけていくんだなあとと思って、ありがとうって言えなかった
の、今でも時々思い出すの、光のなかにかけてゆくヤンデバ君のこと」

正「なんで自分の命なげだして人なんて助けたりしたんだろう？」

雪「わからない、あの時もみんなそんなこと言ってたけど」

正「ごめん、ごめん、やつぱちがう！そんなおごってくれて、光のなかに背番
号十番つけて走っていくような人で、キラキラしてたんでしょ」

雪「してた」

正「じゃ、やつぱ助けられる！と思ったんだよ、ヤンデバ君はできると思って
最後まで未来をみながら死んだんだよ」

雪「そうだね」

正「そうだよ」

雪「あの時、ありがとうって言っておけばよかったなあって今でも思うの」
正「そうか、もう言えないのか（落ち込む）」

雪「大丈夫？」

正「大丈夫かな？あーすればよかったかな？こうすればよかったのかな？」
雪「なにをどうすればよかったの？」

正（雪に聞く）あーすればよかったかな？こうすればよかったのかな？」
雪「なにをどうすればよかったのかなんてわからないわよ」

正「あーすればよかった。こうすればよかった。って一日が終わるね」

雪「一日を積み重ねて、また一日が終わるね」

正「僕は雪ちゃんにあーしてあげればよかったかな？こーしてあげればよかったかな？と後悔ばかりして、一日が終わるよ」

雪「私を見殺しにしてそれでも私を愛していると言うつもり？松田君がそんな仕打ちをするなんて」

正「すぐに逃げ出さなくちゃ気ままな人生を送ってきたんだ 僕を逃がしてよ」

雪「そうね。あれ、このカレンダーもうずいぶん前のだ、古くなってる。ほら、

今日は水曜日なのに、このカレンダー金曜日になってるよ！変えないといけなくない？」

正、雪を抱きしめる。

二人ともきつく抱き合う。

正「だから、どこにでもおいておくから、カレンダーも今年のか？昨年のか？3年前のかわからなくなるんだよ、いらぬものは捨てない！ほら書類は全部書斎に持って行って」

雪、正の手をはなそうとするが正「このままいい」と言うので、雪がものすごく強く正をぎゅーつてすると正「痛い、痛い呼吸、呼吸できないよ」雪「このままで」正「無理無理、痛い、はなして」と雪の手をはなす。

雪「やっぱ、そこ、そこがいいよ」

正「なにが」

雪「例えば、私が先に死んでも、松田くんなら大丈夫って思わせてくれるから」

正「大丈夫じゃないよ」

雪に抱きつく正。

雪はプロレスのように正をしめる。

正、そこから逃れようと激しく足をバタバタとさせる。

雪「そんなことないよ今も」「ない、ない、無理はなして」って言ったでしよう

正「うん」

雪「そうして私の手を無理矢理離した」

正「うん」

雪「ねっ、私の手を離れたってことは、きびしいことに出会っても、必然を前にしたらばかばかしい希望をみながら、ユートピアを守ろうとするから大丈夫ね」

正、雪に抱きつきながら

正「大丈夫じゃないよ、大丈夫じゃないよ」

雪「私、たった今人を殺してきたのよ、頭に銃口を突きつけて引き金を引いたら死んだの、人生は始まったばかりなのにもう駄目にしてしまったの」

正「嘘ばかり」

雪「私は死んだのよ！」

正「嘘ばかり」

雪「本当よ、私はあの日死んだのよ、明日の今頃になって私が戻らなくても今のままで生きていつて、まるで何事も無かったかのようにユートピアがあるんだから大丈夫ね」

正「ユートピアってなんか古いね」

雪「松田君は自分が新しいとでも思ってるの？」

正「古くはないよね、まだ、ほら若いし」

雪「古いから、人として十年以上は遅れている不思議な存在なんだから」

正「それいいの？」

雪「ユートピアだもん」

正「ユートピアかあ、どんな所なんだろう」

雪「ユートピアが場所としてあると思ってるの？」

正「あるでしょう、ユートピアがある信じる。信じるのが大事だよ、根拠を求める前に信じないと」

雪「ユートピア信じるの？」

正「じゃ、信じるかな」

雪、突然ガクガクと震え始める。

正、雪をこすりながら

正「大丈夫、ねえ大丈夫」

雪「さようならもう行かなくちゃ」

正「どこに？大丈夫、大丈夫じゃないよ、流されながら笑顔で手をふらないで

よ、ここにいてよ、大丈夫じゃないから！」

雪「私死にたくないよ。変わってくれる？（強く言う）」

正「変わらないよ、僕だって死にたくなんだ（強く言い返す）」

雪「ほらそこ、やつぱり大丈夫よ」

正「大丈夫じゃないよ」

雪「今はどこにもいない」

正「今はどこにもいない」

雪「一緒に暮らしてきた時間を」

正「一緒に暮らしてきた時間を」

雪「ずっと夢をみて」

正「ずっと夢をみて」

雪「思い出」

正「思い出」

正「時々、考えてしまうよ」

雪「時々、考えてしまうよ」

正「いつそのこと」

雪「いつそのこと」

正「うまれてこなければよかった」

雪「うまれてこなければよかった」

正「うまれてこなければよかった！」

雪「たいしたことじゃないわ、誰もが一度は思う事よ」

正「たいしたことじゃない本当に僕は、たいしたことじゃない。」

雪「風がふいてる」

正、突然背中がかゆくなる。

正「風がふいてるけどさあ（背中が突然かゆくなる）あれ？ちょうど手が届かないんだよ」

雪「なに？」

正「かゆくなっちゃった背中」

雪「ここ（かいてあげる）」

正「ありがとう、ねえこれもユートピア」

雪「（正の背中をおもいきりたたいて）なおった」

正「痛いよ、僕は、武器は持ってないんだから、たたかないでよ」

雪「かゆいのなおった？」

正「なおってきたかな」

雪「かきすぎると、ずっとかゆいままなの、ほら我慢して（背中をたたく）」

正「かかってこいよ、かかってこいよ」と言いながら雪のベストをぬがして手にもつ。

雪「（バンバンと叩きながら）ほら、我慢して、なおった？」

正「なおった！もうかゆくない、すごいね」

雪「でしょう」

正「ほら、書類は書斎に持っていて」

雪「うん、わかった持っていく（書類は机の上においたまま）」

正「うん（眠る）」

雪「また眠るの？よく眠るよね」

正「よく眠るんだよ、もう特技といってもいいくらいだよ」

雪「ねえ、私なんて名前だったか覚えてる？」

正「覚えてるよ」

雪「そう、じゃもういいの、寝て」

正「うん」

雪「おやすみ」

雪、上手側にはける。

正「おやすみ」

正、雪のベストを握り締めて寝ている。

正の絶望的なあの日の再現として映像と音楽が町の日々をみせる。
やがて静かになり。

ゆっくりと舞台の明かりがつく。

眠った状態から目を覚まし、机の上にある写真縦をみる。

雪が死んでしまったことを自覚する。

正「(ゆっくりと、静かにしゃべり始める) 夢から目をさまして、部屋をみわ
たすと、ぼんやりと赤い光がみえた。ビデオの「録画しますよ」の合図
が、赤の光を小さくこちらにむけていた。合図というのは赤なのか…あ
れ？こんな明るい赤だったかなと思いつながら録画を止めた。すると、思っ
た以上に部屋が暗闇につつまれた。窓から少し明かりがもれていて、明か
りがあるそちらに歩いていった。なにか蹴飛ばしたようにも思っただけれど
窓のほうに歩き、窓を開けた。もうずいぶんと暗闇をみあげてないなあと思
いながら、まだ明けきらない暗闇の空を見上げると星が小さくひかっ
ていた。僕は、窓から不自然に身体をだして、少し南側に、そう南側に傾き
ながらしばらくみていたが、流れ星は流れなかった。(寝てる) また、見
逃したのか見逃したのかな？なにかを見逃したのかな？(静かに、涙を流
すようなイメージで読む) ああすればよかったかな？こうすればよかった
かな？あーすればよかったのかな？ああ、もう、わかってないんだよ、そ
こらへんにバラバラとただ写真とか書類をいているような人だったもの
ね、もう、全然わかってないんだよ！あちこちにおいててさあ、写真もフ
レームになんてしなかったでしょう。写真フレームは写真を大事に思って
飾るものだから、フレームにいれないでそのへんにバラバラにおいておくよ
うな感じじゃないはずなのに、いつでもさあ、どこにでも置いてたよね。
書類も写真も、大事なものは残るのにさあ、そんなの誰も気にしないとか
言ってたでしょう。大事な写真はちゃんとフレームにいれて飾るんだよ、
フレームにいれてこそきちんと置いて残るんだよ、フレームにいれてこそ
一枚の写真なんだから。(歩いていて服をみて) あっ、着替えないと、
そろそろパジャマに着替えなといけないなあ、「来るぞ！」じゃなくて、
「来てるかも！来てるかのよ！」って僕も叫べばよかったんだね。僕、嘘

つきじゃないよ、ちよつと言ひ方間違えただけでしよう「来るぞ！」じゃなくて「来てるかも、逃げた方がいいかもー」みたいな感じで言ったんだよ、あれ、そろそろ着替えなど、時間だよ、着替えないと」

正、始めのように机と椅子のセットに座り、前をしっかりとみて手を振っている。

映像、家の明かりがヘリコプターの激しい音とともにつき、ゆっくりと消えてゆく。

暗転。

完

何が私たちに起こったのか忘れないために